

「今、あらためて『教育』を考える～家庭・地域が支える子どもの教育～」を開催

社会貢献フォーラムが、2010年2月13日、岡山県岡山市・山陽新聞社「さん太ホール」にて開催された。今回のテーマは「今、あらためて『教育』を考える～家庭・地域が支える子どもの教育～」。学力低下や凶悪犯罪など子どもに関する問題に対峙して、家庭はもちろんのこと、地域における社会貢献活動などの意義と可能性を探り、明日への方向性を確かめるフォーラムとなった。



「忍びざるの心」に支えられ、育てる教育が求められている。

2月13日、岡山県岡山市にある山陽新聞社さん太ホールには300人以上の人々が集まり、会場は満員となった。今回の社会貢献フォーラムは「子どもたちの学力低下や生活習慣の乱れ、さらには青少年犯罪の低年齢化や凶悪化など、子どもたちや青少年に関する問題について、学校や行政でも様々な対策や取り組みが行われている

が、いまだ問題の解決には至っていない。そこで、この子どもたちへの教育支援の分野における社会貢献活動の役割と可能性について、教育の専門家や地域で社会貢献活動に取り組んでいる方々の話を聞きながら考えていこう」という主旨で企画された。

フォーラムは二部構成で、第一部では作家の童門冬二さんの講演、第二部は4人の有識者によるパネルディスカッションである。

山陽新聞社 広告局 浅沼慎太郎局次長が前述の主



旨を述べた開会のあいさつに続いて、第一部として、童門冬二さんの「日本人の知の遺産」と題する講演が始まった。

童門さんは軽妙な口調で語り始めた。題材となったのは岡山藩にあった藩校「閑谷学校」である。江戸時代に入ると多くの藩校が作られたが、閑谷学校はその最初の学校であるとともに、独自の発想をもって岡山藩主 池田光政が建造したという。

「独自の発想とは中江藤樹や熊沢蕃山の思想を取り入れ、陽明学に近い精神を藩士たちに学ばせたことにあります」と童門さんは語る。

それを象徴する言葉として「忍びざるの心」と「恕の精神」をあげた。前者は他人が苦しんでいるとき「助けたいとは思わない」という心であり、後者は人を許すという気持ちに加え、どれだけ自分が相手の立場に立って物事を考えることができるかという意味である。

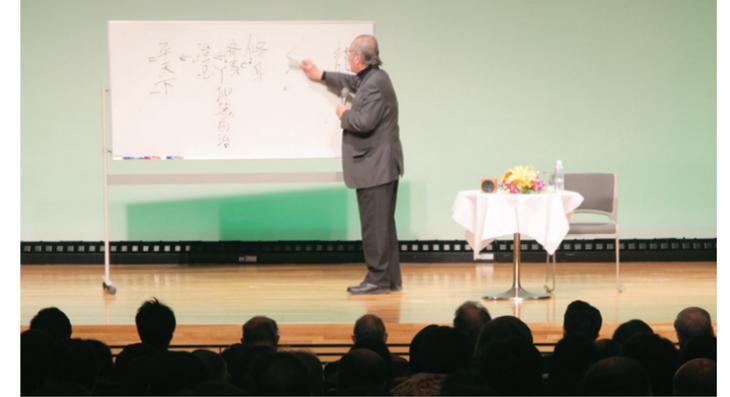
池田光政は今後の武士は護民官であり、民衆と同じ立場で考え、それを守る役割を担う必要があると考えた。経済的知識と視点を持つとともに、人を思いやる気持ちを育てるために「閑谷学校」ができたのである。

童門さんは「社会貢献」のあり方に必要な知の財産について史実や儒教のエピソードを交えながら語り続け、今こそこうした教育や制度が必要であると結んだ。

「夜型社会」が家庭と子どもの学力を害している。

第二部のパネルディスカッションは、東京農業大学客員教授で元NHK アナウンサーの松田輝雄さんをコーディネーターとして、立命館大学の陰山英男教授による「基調報告」から始まった。

陰山英男教授からは日本の家族間の関係の変遷や子どもの生活習慣の変化と学力との関係など興味深いデータが示された。会社や親戚などよりも家族を大切にしているという人が増えているにもかかわらず、帰宅時



間は遅くなり、家庭における父親の存在感が薄くなっている。日本は「夜型社会」となり、その悪影響が子どもたちに出ているという。

「4時間しか眠らなければどんなに学習しても無駄で

第一部出演者プロフィール



童門冬二さん(作家)
1927年東京生まれ。かつて東京都庁に勤め、都立大学事務長、広報室課長、企画関係部長、知事秘書、広報室長、企画調整局長、政策室長などを歴任し退職後、作家活動に入る。歴史の中から現代に通ずるものを好んで書く。執筆活動のかたわら、講演活動も積極的に行っている。第43回芥川賞候補。日本文芸家協会、日本推理作家協会会員。平成11年勲三等瑞宝章受章。
[主な著書]小説上杉鷹山(上・下)、近江商人魂(上・下)、情の管理・知の管理、大江戸豪商伝、洗足栄一人間の礎、田沼意次、国僧日蓮(上・下)、吉田松陰(上・下)、前田利家など。

第二部出演者プロフィール



松田輝雄さん(コーディネーター)
1963年早稲田大学卒業後、NHK入局。アナウンサー勤務、エグゼクティブアナウンサーを経て、1966年よりフリーランスとなる。現在は、東京農業大学客員教授、すぎなみ地域大学学長、日本野鳥の会顧問、樹木医。テレビ・ラジオ出演以外にも活動範囲を広げ、自然環境、家族をテーマにした講演やフォーラムなどで全国を駆け回っている。



陰山英男さん(立命館大学教授)
1958年兵庫県生まれ。岡山大学法学部卒。反復練習で基礎学力の向上を目指す「陰山メソッド」を確立し脚光を浴びる。2003年尾道市立土堂小学校校長に就任。バスマス計算や漢字練習の反復練習を続け基礎学力の向上に取り組む一方、そらぼん指導やコンピューターの活用など新旧問わず積極的に導入する教育法によって子どもたちの学力向上を実現している。立命館大学教育開発推進機構教授(立命館小学校副校長兼任)。

すし、朝食をとらなければどんどん学力は低下すると思ってください」と陰山英男教授。あまりに明確なデータを示され、聴衆の危機感否応なしに募った。

続いて、社会貢献の事例として岡山県遊技業協同組合の松村高男理事長が「昨年までの通算44年間に総額、約1億7,600万円を延べ1,300団体に助成するなど、組合が取り組む青少年健全育成支援事業」について報告。松村理事長は厳しい経済状況の中で資金を提供している遊技業協同組合員への感謝とともに、支援団体の活動の様子を、写真を使いながら説明した。44年間の重さを示す内容だった。

「ナナメの関係」が、社会貢献のひとつの方向性となる。

2つめの事例報告は、山陽新聞社論説委員の影山美幸さんの「NIE」(エヌ・アイ・イー)活動の報告である。Newspaper In Education (教育に新聞を)の略称であり、その一環として同新聞社では2年前から新



聞記者が学校を訪問して授業を行うという試みを行っている。

車内で新聞を発行できる設備をもった特装車「さん太号」で学校へ出向き、まず、授業の様子を記者が取材し、新聞を製作する。そして授業が終わるときには生徒たちにその新聞を配るのだ。さらに記者は見出しの付け方、文章の書き方、注意点などを解説する。

「自分たちのことが報道されている新聞を見て、子どもたちの目がきらきら輝くのがはっきりわかります」と影山さん。

子どもたちがNIE活動での体験を感想文にして山陽新聞に送り、紙面に紹介されることもあるという。

NIEの意義を「教育」という観点で、影山さんは2つのことをあげた。

1. 情報社会の中で、情報発信の向こう側に人が存在していることを子どもたちが知ること。
 2. 閉鎖的になりがちな学校という場所に、他の大人たちが入り、働いている姿を見せること。
- それだけで、いろいろな生き方を子どもたちに示すことができ、偏重しがちな価値観に多様性を持たすことができるのだ。こうした仕組みをもっと社会の中に入れていくことが必要となる。

そのキーワードとして、影山さんは「ナナメの関係」という言葉を紹介した。親と子や教師と生徒の関係はタテの関係で、そこには明確な命令系統がある。それに対

してナナメの関係とは、何かを強要したり、評価したりすることのない関係だ。昔でいえば近所のおじさん、おばさんが担っていたような役割だが、今はそれが圧倒的に不足しているという。

「教育と社会貢献活動を考えたとき、ナナメの関係を増やすことが必要ではないかと思います」影山さんはそのように語って報告を締めくくった。

より多くの「出会い」を子どもたちに与えよう。

最後にバルセロナ五輪シンクロメダリストでスポーツコメンテーターの奥野史子さんが語った。

奥野さんの主張の主題は「出会い」である。

「私自身ごく普通に育ったのですが、いくつかの『出会い』が五輪選手という私を作りました。そのひとつが井村雅代コーチとの出会いです。本当に怖い方でしたが、それこそ先ほどの『ナナメの関係』のような人生の良き先輩でした」と奥野さんは語り始めた。

五輪選手というと特別な存在だと思われるだろうが、「出会い」次第で、人生は大きく変わるのだという。また、奥野さんが小学生の時のスイミングスクールの先生たちが、生徒に見せるために私財を投じて米国のトップ選手だったトレイシー・ルイツを招いてくれた。世界のトップを目の前で見て、その女子選手が世界選手権で優勝したとき、奥野さんの中に五輪を目指そうという気持ちが芽生えていたという。

日本のアスリートたちには皆そうした経験がある。多くの出会いが次の世代を育てるきっかけになる。だから、今度は自分たちが恩返しをするために奥野さんは、ご主人の朝原宣治さん(北京オリンピック陸上メダリスト)らと社会貢献活動「アスリートネットワーク」を始めようとしている。会長には全日本女子バレーボール前監督の柳本晶一さん、代表には朝原さんが就任する予定である。それぞれの分野の実技指導のほか、難病と闘う子どもたちの慰問などにも力を入れていくという。

こうしてパネラーたちから出る多様な意見を、コーディネーターの松田さんがいったん咀嚼し、聴衆の立場

で何ができるのかを問いかけていく。また途中、「リラックスして楽しく議論を進めましょう」と松田さんの発案で、みんなで立ち上がって笑顔を作るなど、深刻になりがちなテーマの議論が和やかな雰囲気の中で進行していった。

最後に、全日本社会貢献団体機構の松尾守人理事が関係者のこれまでの労をねぎらい、

「これだけのことをしているのですから、もっとアピールもしながらさらに頑張ってください」と声をかけてフォーラムの幕は閉じた。

少しでも住みよい社会を子どもたちに残すことが私たちの使命です。

岡山県遊技業協同組合理事長
松村高男さん

このフォーラムでは、さまざまな分野のプロフェッショナルの方に貴重な情報やご意見を頂戴して、たいへん有意義な会にすることができました。今回岡山県で開催できたことは、長年の諸先輩方の努力が評価された成果だと、たいへんありがたく受け止めておりますが、全国のご同輩の皆様のためにも社会貢献活動を積極的にアピールしなければならないと感じております。

現在のような不況下にあって、青少年健全育成に対する支援事業がよくここまで続いてこれたという気持ちもありますが、社会を取り巻く状況は悪化している部分も多く、組合への要請はより多くなっています。内輪の話になりますが、私にも9人の孫がおります。テーマでもあった「教育」を含め、少しでも住みやすい社会を残してあげることが大人たちに課せられた使命でもあると思います。

「忍びざるの心」などフォーラムで先生方からうかがったご示唆を糧としながら、これからも全国の皆様と励まし合いながら、将来への新たな歩みを進めていきたいと考えております。

第二部出演者プロフィール



松村高男さん(岡山県遊技業協同組合理事長)
1947年岡山県生まれ。1989年岡山県遊技業協同組合理事に就任。常務理事、副理事長を経て2006年から理事長として現在に至る。同組合では、青少年の健全な育成のために1965年から40年以上にわたり、様々な団体への支援を続けている。また将来を担う子どもたちのため教育や文化活動にも力を注ぎ、(財)岡山県青少年財団常務理事等で活躍中。



影山美幸さん(山陽新聞社論説委員)
岡山大学文学部卒。1991年山陽新聞社に入社、経済部、政治部記者などを務めた。2000年から2007年まで解説委員として主に教育取材を担当。教育界と新聞界が協力し、社会性豊かな青少年の育成などを目的に掲げ、学校で新聞を活用するNIE(エヌ・アイ・イー)活動にも携わっている。現在は論説委員。



奥野史子さん(スポーツコメンテーター/バルセロナ五輪シンクロメダリスト)
1972年、京都市生まれ。同志社大学大学院修了。92年バルセロナ五輪でソロ、デュエットともに銅メダル。94年ローマ世界選手権でソロ、デュエット銀メダル。95年に現役引退。2000年より2002年12月までシルクドソレイユに所属。ラスベガスで最高峰の「O」(オー)に出演を果たす。02年、当時陸上短距離の朝原宣治選手と結婚。現在は2児の母。またスポーツコメンテーター、京都市教育委員など幅広く活躍している。